



加藤 元の ペット

と暮らして みませんか

48

今回は文明病の拡大、それに伴う子供たちや動物たちへの悪影響について述べました。今回は、その悪循環に歯止めをかけるためには、「人、動物、自然の絆」をより強める必要性が高まっている、という点に触れましょう。

植物、森や山、川や海などの自然と身近にふれあえることは、素晴らしいことです。そう感ずるのは、人も自然の一部だからではないでしょうか。動物もかりです。実際、地球上に人類が誕生して以来、「人と動物と自然」は、切っても切れない絆で結ばれてきました。しかし、現在の人類による自然環境破壊と汚染が、このまま拡大していけば、地球上で人、動物、植物は生きてゆけなくなります。それを防ぐためには、自然

命の教育中

「人、動物、自然の絆」深めよう

を、そして「生きものを思いやる気持ち」を大切にし、実行していかねばなりません。

そのための教育こそが「ヒューマン・アニマル・ボンド」(HAB)教育です。犬や猫をはじめとした動物たちとの「ふれあい」で生れる相互作用が、「HAB」(人と動物との絆)と呼ばれるようになったのは一九七〇年代からです。そのころから、いろいろな科学的な研究が進められました。

例えば、「人と動物とのふれあい」は、双方の心身によい影響を与え合うことが明らかにされました。そしてその成果を社会的に応用するプログラムが、八〇年代に米国のデルタ協会で確立され日本でも実行されるようになりました。

それは、社団法人「日本動物病院福祉協会」による「CAPPP活動」(Companion Animal Partnership Program)であり、マスメディアからは「アニマルセラピー」と言われています。学問的にも確立し、動物介在活動、動物介在療法などといわれています。

これらの動きは、HAB教育の重要性が認識されつつあることを示しています。そして私は今、この教育が世界中の子供から大人までに広がり、継続していくことを願っているのです。

(ダクタリ動物病院広尾病院院長、日本ヒューマン・アニマル・ボンド・ソサエティ会長)

《産経新聞2005年3月20日掲載》